Osaka University Knowledge Archive

Title	ブラジル人就労者における日本語の諸相
Author(s)	Nakamizu, Ellen
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3151040
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 1 】

氏　　名	NAKAMIZU（ナカミズ）　ELLEN（エレン）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　14105　号
学位授与年月日	平成10年7月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科　日本学専攻
学 位 論 文 名	**ブラジル人就労者における日本語の諸相**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　真田　信治 （副査） 教 授　土岐　　哲　　助教授　渋谷　勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は，日本におけるブラジル人就労者の日本語の習得，およびその使用の実態を究明することを目的としたものである。

論文は，6章から構成されている。各章の内容は，次のようにまとめられる。

まず第1章では，論文の目的を述べ，ブラジル人就労者の社会的背景について詳細に記述した。ブラジル人就労者の使用する日本語は，多くの場合，いわゆる自然習得によるものである。これまでの，第2言語としての日本語の習得における研究は，そのほとんどが教室内で正式に学習したのちに社会的な環境で日本語を使うようになった人の場合を分析の対象にしてきた。それは対象者の多くが教室での学習を出発点としている留学生，あるいはビジネスマンなどに限られていたからである。しかしながら，近年は，生活しながら日本語を自然に習得する人々，具体的には日本人と結婚した人や日本に移住した就労者が増加しつつあり，それを受けて自然習得の研究に取り組むべき必要性が生じてきたのである。

本研究で対象としたのは，職場で日本語の自然習得がすでに進みつつあった時点において，地域社会のボランティア団体が営んでいる日本語教室で学びはじめた人々である。これらの人々の日本語習得，およびその使用に関しては，次のような問題が存在する。

それは第1に，自然習得から学習へ，というプロセスを経る彼らの日本語が，学習によってどのように変容するのか。第2に，学習後の時点において自然習得によるインプットの影響がどれほど残存しているのか。そして第3に，それらが彼らの自然談話においてどのような形式で現れるのか。などの点である。

第2章では，まず前半において，欧米と日本における第2言語習得に関する先行研究を検討し，本研究の位置づけについて論説した。そして後半では，本研究における調査フィールド，調査法，インフォーマントの属性，日本語のインプット環境などについて詳しく記述した。

調査は，1993年から1997年にかけて，大阪府と滋賀県をフィールドとして行なった。

まず，ブラジル人就労者を対象に，彼らの日本社会における（言語）生活の諸側面に関するアンケート調査を実施

した。そして，その中から，代表的な3名のインフォーマントを選定して，この3名のインフォーマントの自然談話データを大量に収集し，そのデータに基づいて，彼らの談話行動，言語形式の運用を縦断的に，また横断的に詳細に分析した。

第3章では，アンケート調査の結果を中心に，ブラジル人が形成する日常の社会的ネットワークの性質を明らかにし，それらのネットワークが，彼らの日本語習得・使用にどのように関与しているかについて分析した。

まず，ブラジル人の多くは，日系人であるにもかかわらず日本語を使いこなせる人は少ないことがわかった。彼らの内省では，受動的な話者（passive speaker）が最も多いようである。要するに，聴解能力はある程度あるものの，会話能力が低いということである。また，日本語能力や日本語習得に関与する変数としては，日本での滞在期間は重要ではないことがわかった。たとえ長く滞在していても，日本語を使用する機会が少なければ滞在期間の影響はほとんど見られないからである。そこでは，ブラジル人たちが形成する社会的ネットワークが重要な役割を果たしていると考えられる。

なお，ブラジル人が持つネットワークは，「職場内」と「職場外」という2つの領域に分けられる。職場外においては，大部分の場合，日本人と接することがほとんどなく，付き合いの範囲がブラジル人同士に限られている。しかし，徐々にではあるが，ボランティアの日本語教室の増加に伴って，職場外でも日本人と接し，実際に学習しはじめている人が多くなりつつある。

第4章では，ブラジル人話者と日本語母語話者による自然談話を分析し，実際の言語運用を記述し，考察を加えた。

章の前半においては，BI，BA，BMという3名のインフォーマントの動詞の使用状況を記述した。ほとんど学習歴のないBMのデータを，ボランティアの日本語教室で学習しているBIとBAのデータと対照的に分析し，BMには動詞の省略が多く，名詞並列文の出現頻度が高いことを明らかにした。また，BI，BAの談話を縦断的に調べ，はじめの頃には過去の出来事・現象を非過去形で表すことがしばしば見られたのに対し，調査の最後の段階になると過去形が多く用いられるようになったことを明らかにした。動詞に関しては，形式の習得が意味や機能の習得に先立つようである。なお，職場場面では過去の出来事を話題にすることが少ないため，非過去形が多く現れる傾向が指摘できる。

章の後半では，モダリティ表現の使用について考察した。モダリティ表現の中では，終助詞の「よ」と「ね」が調査の最初の段階から多く用いられた。特に，「ね」の使用が注目される。ブラジル人は「ね」を複数の文脈で用いるが，そこにはポルトガル語からの転移が認められるのである。また，語彙や表現力が足りない場合には，「ね」を補充形式として用いる傾向も観察される。

第5章では，スタイル切り替えの習得という社会言語能力の一側面を考察した。分析によると，BI，BAの運用とBMの運用とは異なっていることが判明した。BIとBAは，学習することによって日本語の標準的なスタイルにさらされ，そのスタイルと職場で用いられる方言的なインフォーマルなスタイルとの差異を意識するようになる。そして，職場場面と教室場面において，自ずからスタイルを切り替える能力を発達させる。こうしたスタイル切り替えは，特に「普通体」と「丁寧体」の使い分けにおいて顕著に見られた。一方，BMは，職場場面と教室場面とにおけるスタイル差を認識できないようである。このようなインフォーマント間に見られる差異は，主に意図的な学習の有無に由来するものと考えられる。

最後に第6章では，論文の全体を総括し，調査法などに関する反省を述べた。また，今後に展開すべき課題を提示した。

論文審査の結果の要旨

日本に在住しているブラジル人は，現在20万人近くにのぼっており，その大部分が就労者として来日した人々である。これは，80年代の後半にブラジルの経済が悪化しつつあった一方，日本の好景気が最高潮に達した状況の中で，いわゆる「出稼ぎ」現象が起きたことに起因する。これらブラジル人就労者の使用する日本語は，その多くが自然習得

によったものである。

ところで，これまでの第2言語としての日本語習得に関する研究は，そのほとんどが教室内で正式に学習したのちに自然な環境で日本語を使用するようになった人々が分析の対象となっていた。その理由は，最近まで，日本語を習得する人々が，教室を学習の出発点とした留学生，あるいはビジネスマンなどに限られていたからである。しかしながら，近年は，生活しながら日本語を自然習得する移住者や日本人と結婚した配偶者などがだんだんと増えてきている。そのような中で，第2言語としての日本語習得の場合においても，その自然習得をめぐっての研究に取り組むべき時代が到来したのである。本論文は，その前衛的な研究として位置づけされるべきものである。

本論文は，まず滞日ブラジル人の属性，言語的な背景，日常のネットワークをアンケート調査を通じて調べた上で，自然談話での具体的な日本語使用を綿密に分析している。自然談話においては，特に動詞とモダリテイ表現の使用について詳細に記述している。またスタイル切り替えの習得過程を追究することによって，社会言語能力の一側面を明らかにしている。これらの成果は，今後に展開されるべき研究のための基礎となる貴重なものである。

なお，インフォーマントをめぐる「職場内」と「職場外」，それぞれでの日本語のインプットについて分析した結果では，特に職場において，日本語母語話者による方言コードとの接触が多いにもかかわらず，ブラジル人自らによる方言形式の用例は少ないことが指摘される。学習の有無に関係なく，方言形式の使用が動詞否定辞の「へん」や指定辞の「や」に限られている。この理由は明らかにされていないが，今後，方言コードのインプットと習得の関係，また方言に対する意識の面について，より深い調査を行う必要があろう。今回は，実際の言語使用の実態を重視した調査に終始しているが，ブラジル人の日本語の習得における動機，また日本語に対する意識など，言語使用に潜在している意識面を調べることが望まれる。

本研究での自然談話調査においては，各インフォーマントに個人差があるとは言え，共通する点も多く見出せていることには十分な意義を認めることができよう。しかし，今後は個人研究ではなく，大規模な共同研究に進めるべきであろう。そこでは本研究でカバーしきれなかった課題や問題点を総括的に明確にすることができるはずである。

今後，ブラジル人の定住化に伴い，日本語の使用にとどまらず，ポルトガル語の使用の実態，特に家庭内での日本語とポルトガル語の併用にかかわる研究の必要性が出てくるであろう。また，外国人就労者と地域住民との葛藤，そしてそのような新しい社会的状況に応じた言語教育のあり方，など，新しい課題も出てきている。

本論文は，ブラジル人就労者の日本語使用の実態という，日本における外国人の言語行動の一側面を調べたものであるが，この研究は，以上の課題に関する研究の糸口ともなるであろう。

以上のように，本論文は，今後に展開されるべき研究への指針となるものであり，博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。